

## 「翁長雄志沖縄県知事のご逝去」

2018年08月13日

沖縄県知事の翁長雄志氏が8日、ご逝去された。残念でならない。沖縄県民の心を代表するような方であったから、県民の落胆はいかばかりかと思う。今年の6月23日に開かれた沖縄全戦没者追悼式典で、安倍晋三首相を見つめ、「民意を顧みず、工事が進められている」と抗議の言葉を語った。その時の翁長氏は、以前とは違い痩せられ、健康が案じられた。最後にテレビ映像で見たのは7月27日で、埋め立て承認の撤回表明の記者会見であった。その時は、声もかすれ、病状が進んでいると思わされた。すい臓がんに冒され、肝臓にも転移していたとのことで、67歳の生涯を終えられた。あまりに早いご逝去を悼む。普天間新基地反対のために、命を削られたのである。

翁長氏の主張は明確であった。沖縄の基地は、戦後県民が収容所に入れられている間に、米軍の剣とブルドーザーで造られていた。辺野古新基地が造られれば、県民の承認のもとで造られることになる。県民が承認して基地を造らせることはできないという主張である。沖縄県民の民意を背景にして「イデオロギーではなくアイデンティティ」を合言葉にして「オール沖縄」を結成し、2014年の県知事選では、10万票の大差で県知事に就任した。翁長氏に寄せた期待は大きかった。翁長氏はもともと保守党の人であるが、顧みられることのなかった沖縄の自治権・アイデンティティを主張したのである。その後の言動は誠実に満ち、政治家として揺るがない姿勢を貫いた。仲井眞弘多前知事は「良い正月を迎えられる」と、埋め立てを承認した。翁長氏は、この承認には「瑕疵」があると、承認取り消しを求めた。沖縄と政府は、工事阻止と続行を巡って「訴訟合戦」をしたが、2016年に最高裁は埋め立て承認取り消し敗訴の判決を下した。翌年、工事差し止めを求めて再提訴したが、今年の3月に却下された。政府自民党は沖縄県民の主張を顧みず、法的正当性があると、日本の安全保障を理由に、米国の言いなりの辺野古新基地建設を進めている。日本の裁判所は、沖縄県民が受けてきた構造的な差別を見ることなく、政府寄りの判決を出し続けている。翁長氏は、米軍に対して「県民は疲れ果てて、何ら信用できない。とても良い隣人とは言えない」と抗議していた。米軍機が再三墜落、不時着しているが、差別的な日米地位協定によって、海上保安庁や警察が近づくこともできない。米軍機の墜落だけでなく、米軍機からの落下物も多く、県民の命は危険に晒されている。翁長氏は、日米両政府に対して、声を上げ続けても、一向に変わらない現実に呆れ、怒り、それでも、諦めることなく抗議し続けてきた。翁長氏はいわば、最後のカードとして、「埋め立て承認撤回」を表明した矢先にご逝去された。道半ばに倒れられ、本当に無念であったろう。

久米島出身の母親を持つ佐藤優氏は、翁長氏のご逝去を受け下記のようにコメントしている。「米軍基地問題を、構造化された沖縄差別と捉えて異議を申し立て、沖縄人のアイデンティティを確立したのが最大の功績だ『沖縄の運命は沖縄人が決める』『二度と沖縄を戦場としない』という翁長氏の遺言を、私たちはどう実現していくかを考えなければならない。」「沖縄タイムス」は、「翁長知事は在任中の4年間、安倍政権にいじめ抜かれたが、この姿勢が揺らぐことはなかった。安易な妥協を拒否し、理不尽な基地政策にあらがい続ける姿勢は、国際的にも大きな反響をよんだ。知事は文字通り命を削るように、辺野古反対を貫き、沖縄の自治と民主主義を守るために政府と対峙し続けたのである。その功績は末永く後世まで語り継がれるに違いない。心から哀悼の意を表したい」と、功績を称え、弔意を表している。

辺野古の米軍キャンプ・シュワブゲート前では、翁長氏のご逝去を悼んで黙祷を捧げ、遺志を継ごうと呼びかける言葉が飛び交っているという。私も参加しているように、情景が目につく。